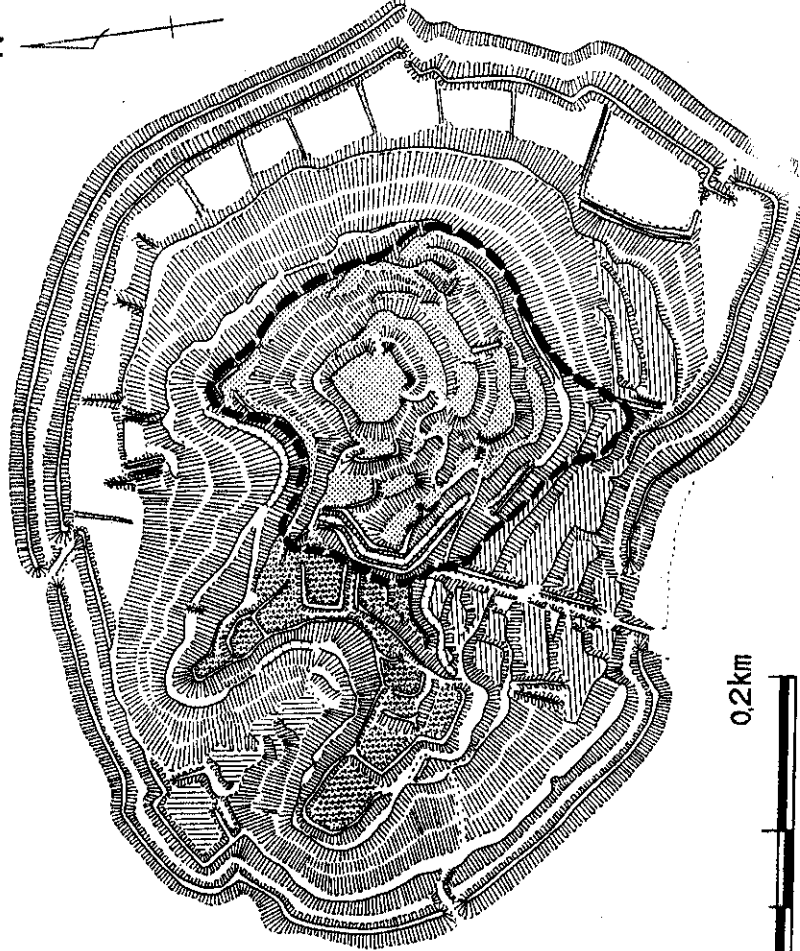


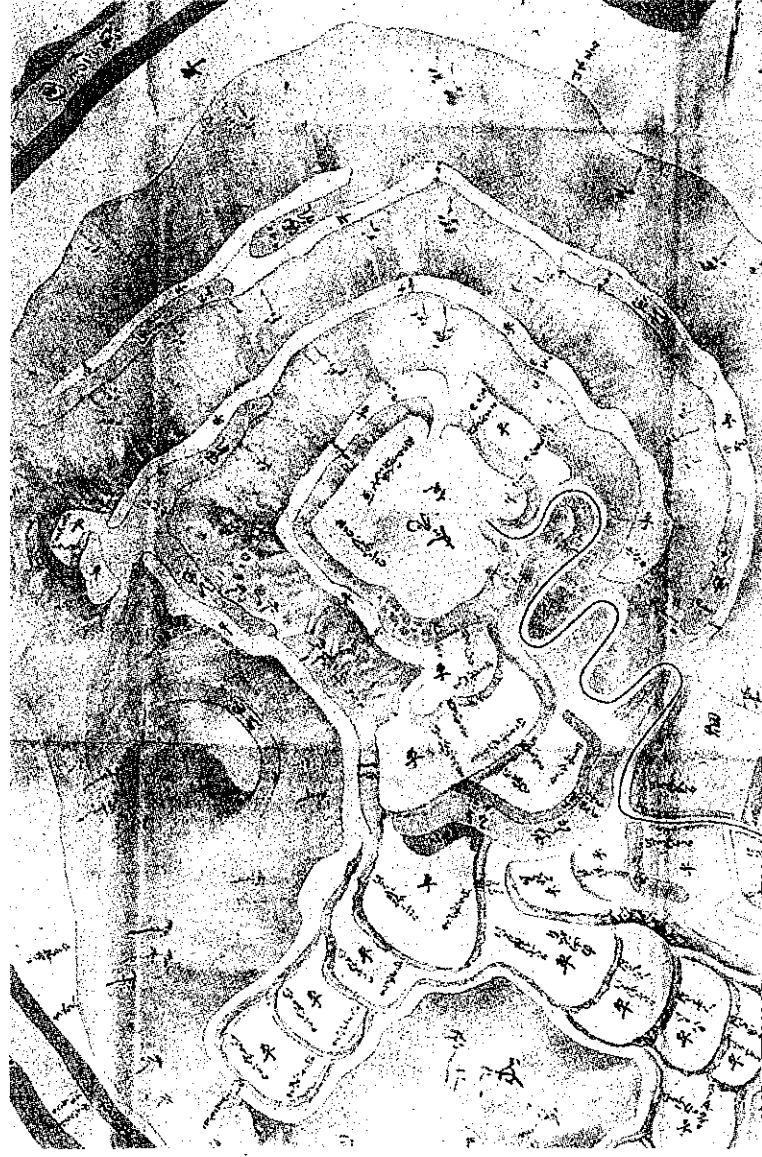
史跡小牧山主郭地区第3次発掘調査 現地説明会資料

平成23年3月5日(土)

遺跡名 小牧山城 (国指定史跡 小牧山)
所在地 愛知県小牧市堀の内1丁目地内
調査理由 史跡整備
調査面積 約210㎡
調査期間 平成22年11月～平成23年3月
調査主体 小牧市教育委員会



小牧山城縄張図
(破線の範囲が主郭地区)



春日井郡小牧村古城絵図(部分拡大)
※十七世紀中頃 蓬左文庫蔵

1 調査の概要 (何ができてきたのか) 【資料 1】

史跡小牧山主郭地区の発掘調査は史跡整備に伴う事前調査のため、4ヵ年の試掘調査と2ヵ年の発掘調査を経て、今年度が7年目となります。今回の調査と過去の調査成果から、永禄6年(1563)に織田信長が築いた小牧山城の姿が徐々に明らかになってきました。今年度の調査(第3次発掘調査)で得られた主な成果は次の2点です。

- (1) 主郭をめぐる石垣の一部が築城時さながらの状態で見つかりました。これにより、日本の城郭で最も古い時期の石垣がどのような姿であったかが判明しました。
- (2) 石垣の裏側を観察するトレンチ調査を実施したことにより、石垣とそれに伴う裏込石、積土などの構造や築城の様子が明らかになりました。城郭調査で石垣や造成の構造をここまで明らかにした調査例は全国でも少なく、貴重な資料を得ることが出来ました。

調査は平成22年11月より開始し、調査面積は約210㎡です。調査区は大きく3箇所に分かれ、それぞれI区、J区、K区と呼称しています。各調査区から得られた主な成果は以下のとおりです。

【全般】

- ・主郭北西斜面の約35メートルにわたり上下2段の石垣を確認しました。
- ・今回確認できた石垣は、石垣の最下段の「根石」といわれる部分を中心に、石垣列が非常に良好な状態で遺存しており、石垣と石垣の隙間を埋める「間詰石」という小さな石まで残っており、築城当時の石垣のありのままを見ることが出来ます。
- ・石垣背面積土の調査から、築城の際、本来の地表(地山)から2mに及ぶ版築を行うなど大規模な地盤造成を行い主郭(天守)の曲輪を構築していることが分かりました。

【I区】

- ・この調査区は北西方向に台形に張り出している部分で、上段の石垣では用いられている石の規模が主郭斜面の中で最も大きいため、櫓などの特殊な施設を有していた可能性がります。推定石垣高は、3.8m、推定勾配は70度と考えられます。
- ・南側出隅部では、トレンチ調査により石垣背後の構築状況を確認でき、石垣の積み上げと並行して裏込石と背面積土(版築土)を交互に積み上げていく状況が判明しました。
- ・下段の石垣は出隅部分の一部を確認し、上段の石垣と並行して斜面を廻ることが明らかとなりました。また、地山を人為的に切り立てて石垣の背後に裏込石を埋設している様子がはっきりと確認できました。